琶に縁のある漢詩に就て」望月啞江氏の講義があり盛会裡に終始した。

「新しい道」の講演会に琵琶演奏　六月二十四日神戸湊川神社に於て閉院様を始め兵庫県の知名人、思想会の大立者などの集会首記席上柴田旭堂女史（門弟二人同伴）が「大楠公」を熱演して非常な好評であった。

薩摩琵琶晴風会　七月一日夕東京杉並区

夏季演奏会　高円寺会館。太平記一節ー会長浅野晴風、吟・桜花の詩ー河西青山、同児島高徳ー西野青清、重衡ー竹内青寿、吟・静ー佐藤青苑、弁内侍ー本橋錦颯、俊寛ー坂入晴峰、秋海棠ー原島晴洲、茨木ー大関英子、設楽ヶ原ー青木晴城、本能寺ー加藤錦陽、薩摩守ー緒方晴舟、会津の華ー杉山雅俊、武蔵野ー若林晴凌、吟・葉児行ー望月啞江、湖水乗切ー山下晴楓。尚秋の大会は十月十四日(日)昼中野区公会堂に於て谷暉水、鈴木流泉、押川旭葉、普門史城諸氏をゲストに迎えて大々的に開催の予定

中山鳳水会　七月一日昼大阪朝陽会

恒例演奏会　館に於て会員の外東京並に京阪神のゲストを招き盛大に関催された。羽衣ー中山嬢水、菊水の旗ー島津嶺月・米原嶺宗・矢野嶺雲、恵坂嶺雪・石橋嶺妙、秋風故郷山ー辻旭城　吉野山懐古ー石橋旭嶺、城山ー松岡玲水、桜ー天津八千代、羅生門ー寺尾旭吉栄、別れの盃ー矢吹華水、日蓮誕生ー三浦蓮水、花の義経ー天津八千代、伊豆の御難ー藤原英水、竜の口ー小川吟水、舟弁慶ー谷暉水。外に詩吟九題

京都琵琶協会　七月七日午後一時から

七月定例茶話会　会員矢吹華水女史宅で開催。梅雨晴れの三十三度という炎暑に引かえ室内は冷房がよく利いて心地よく二、三会員の研究演奏のあと七月二十三日祇園祭八坂神社奉納演奏の打合せや協会創立二十五周年記念秋の大会には目下NHK放映中の戦国々盗り物語関係の題材を選びその出演順の抽籤などを行い夕食を共にして七時半散会した。（出席者）伊吹、戸田、若宮、田中、梅原、矢吹、安住、牧、古谷、木村、美登里、水内、平井、植村の諸氏

尚八月例会は会員安住旭康女史の斡旋により別頂予告の通り天下の名勝須磨浦海岸の舞子ビラで開催する事に決定した。

故水藤錦穣師百日祭懇談会　門会の主催で故人叙勲（勲五等瑞宝章）のお祝を兼ねた催しが七月二十四日夕刻から東京上野の静養軒に於て琵琶人や一般著名人など約百人を招待して開かれ故人の徳を偲んだ。

北堀省水氏　六月二日病死、享年七十七。輝錦菱、宮本稀水両師に師事し昭和八年総伝、前新潟琵琶協会長兼一水会新潟支部長。錦心流名手として定評があった。謹んで哀悼す。（新潟市西堀前七番町）

ー（予告）ー

○…四明会、正絃会共催夏季一泊弾交会　七月二十九日から三十日に亘り浜松市小野鶴彦氏の斡旋により豊川市の三明寺（豊川弁財天）に於て両会員の外関東関西の各琵琶団体からも参加し琵琶人並にその家族合計六十四名が一堂に会して各流派の覇を競い併せて懇親を篤くする。（次号詳報）

○…京都琵琶協会八月定例茶話会　八月十二日(日)午後一時神戸市乗水区東舞子町垂子ビラ（国鉄、山陽電鉄とも舞子駅下車東へ約七分、電話（〇七八）七〇六ー三七一一番）目にしみる緑、奇麗な空気、淡路島を遥かに望む青い海と明るい空ー元有栖川宮の別荘。宿泊も可。

あとがき

鬱陶しい梅雨期がようやく終って世は文字通りの盛夏となった▲昨年の夏は比較的涼しい日が多かったが今夏は連日の猛暑で而も光化学スモッグ警報が毎日のように発令されている▲茲当分は自然の力と戦わねばならぬ▲心頭を滅却すれば火もまた涼し、琵琶でこの暑さを吹き飛ばそう▲暑中交礼の御申込みを沢山頂戴して感激している▲一応お申込み順に掲載したが不備の点はどうぞ御容赦願いたい。

昭和四十八年八月一日発行（非売品）
編集者　植村　寛
発行所　京水社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話〇七二六（八五）六〇五一番

琵琶機関紙　京絃　第二三〇号　京絃社

薩摩琵琶の真髄とその今昔観（一）

琵琶に鳴物噺子の是非――新傾向長唄と外人の正統観――BBC放送に錦翁師の登場――模倣の天才と失敗の巻――鵜と烏の話

東京　坂本錦道

今日行れている琵琶について見れば、プロ級に属する先生方が琵琶の衰運を如何にして既壓に反さんかと、色々苦心研究されている精進の態度には頭の下る思いであるが、琵琶と云う特殊な芸道に新傾向創作するに当ってその芸道の本体本質を大切にし、それを見失うことなくオリジナリティたものを開発すべきである。

例えば琵琶道に邦楽より助奏を乞うて鳴物噺子を必要とするであろうか、元来琵琶と云うものゝ本質は極めて霊妙なる音色余韻を生命とするもので、古来より琵琶に対し撥一挺をもって体当りするものである。鳴物噺子の雑音が入りその節まわしに義太夫、新内、小唄、長唄風に変化して来るとすれば、新創造どころか邦楽隷従と云われても仕方がない。全く本来あるべき伝統を抹殺し自主性を失ったもので、本質の琵琶は一体何処に行ってしまうのか。

茲に変って来た琵琶に最近琵琶小唄、琵琶仕舞、琵琶講談等々色々現れて来ているが、標題には正直に小唄、仕舞、講談とはっきり出ていて題名表現が直線的で明快だから、聴く方もその積りで聞くせいか罪もないと思うが、只変則的であると云う言葉の表現は甘んじて受けたくてはならないし、万人が心から共感を持つかどうかは、今少し時間をかけて、から評価して行くより他ない。

変態的の創作は何も琵琶界にのみあると限ったものでない、一部邦楽評論家と云う連中がおだてるものだから、邦楽の間にも新風が捲き起って長唄にも西洋楽器の助奏をする奇妙奇天烈なものが出て来た。これは昭和四十四年の春の出来事だが、杵屋六三郎師がパリ公演の際、彼の地主催者側と取り交した演奏条件の中に「長唄は日本伝統のクラシックを第一とする、下手な西洋音楽を入れその伝統を無視したものは止めてもらいたい」と云うものである。外人の同好者の中には、めくらばかりでない日本古来より存続する格式を誇る伝統を、日本人より正直に知っているのだから、猿真似上手の日本人には正に一服の清涼剤であった。

この頃であった。ロンドンのBBC放送が日本古典ものとして尊厳と永き伝統にはぐくまれた薩摩琵琶をその放送網に乗せる事が企画され、NHKを介して吉水錦翁師の「武蔵野」を選んだ。これとても英国人は、その国の伝統と格式を尊ぶ国柄であるところに重大なる含みがある。決して今流行の奇想天外と云うか、中途半端な芸術には見向きもしない理由があったと私は思うのである。

日本伝統の本質を見失って海外で赤恥をかいた例は沢山あるが、もう一つの例として十年ほど前のこと、日劇のダンシングチームがロンドンで公演された時のことである。その不評は全く予期せぬものであった。余りの酷評にヨーロッパに於ける公演予定を半分で打ち止め、帰らざるを得ない窮地に追い込められた。ロンドンのイブニングスターズ紙の評を取り上げて見ると

「日本人の持っている物真似の才能がこれ程はっきり表現されたものはない、この公演から三分の一に当る東洋的の色彩を取り除けば何の価値も見出せない、男性歌手はシナトラばり、女性歌手はベギー・リーそっくりだ、もし之が東京の現状としたなら、日本で米国大統領選挙が行われる事も遠くない。」

と評された。その他の各紙や各界からお話に

ならない酷評を下された。この物真似は洋舞洋楽にしても先進国の二番煎じの亜流で、そこに日本に於て如何に八頭身の美人を選んだとは云え、国外人より観れば日本娘の体格というものは、足は短く胴長の醜体はヨーロッパのドサ廻りの旅芸人より数等落ちる代ろ物と結論が下されたのであった。彼の地一般の希望するものは、日本の持つ偽らざる真の伝統の中から、正直なそして赤裸々な民族舞踊や音楽を期待されていたにも拘らず、西洋カブレも茲まで来て赤恥をさらすとは、まことに心外千万の事であった。

何故に日本人は父祖より受け継いだ伝統を尊重し誇りを持てないのか、日本婦人は漆黒の髪をもって美の頂点として来た、それがオキシフルを吹っ掛けて赤毛に染め、金髪の西洋人ぶっているのも、おかしいのを通り越してみじめさに見えるし、目の廻りをアイシャドウとか何とか云う色を塗って、狸の化け物になって得々としている姿、次に目の玉を青くする工夫が必要となって来る時はどうする。

呵々

昔の笑話に鵜が水に潜って魚をおいしそうに食べているのを、川岸で見ていた烏が「よし俺も一つ御馳走に」と潜った途端に溺れて死んだと云う話があるが、自分の誇るべき本体を見失った烏の芸は琵琶界にも実在している。邦楽屈従、筑前寄丶奇矯なる創作、笑話や海外の三例を他山の石として肝に銘じ、創作や新風開発は一夜漬けにして出来上るものでない、じっくり本体に磨きをかけ、長い長い時間と積重ねに更に積重ねて、本体を大切にして進歩発展を期すべきである（未完）。

七月号「本能寺の変」を読んで

竹のなか・破局への道

——光秀を悼む

高木　正

老の坂を東にこえると大枝の大竹藪がつづく。明智光秀の運命は、ここから急に大きく変転する。そして、秀吉と天下を賭けて対決した山崎の古戦場、天王山や円明寺川や勝竜寺城一帯も一面の竹藪であった。

ことにいまなお光秀の怨念がこもるという終焉の地、小栗栖もまた竹藪である。

このように竹の背景の上に、光秀の悲劇を重ねてみるという発想の小文は、歴史を語るというよりは、光秀の魂を鎮める叙事詩とでもいうべきかも知れない。

竹の峠、老の坂

丹波、山城の境界線をなす愛宕山系は南へつらなり、ボンボン山から天王山に達して淀川に突出する。この山ふところのほとんどは竹藪におおわれ、ことに老の坂をくだった大枝のあたりは京の代表的な竹の里である。

天正十年六月二日の未明、光秀の軍勢は、山陽の詩の如くことをかけくだる。

老の坂西に去れば備中の道
鞭をあげて　東を指せば天なお早し

我が敵はまさに本能寺にあり

「信長の閲兵をうける」といって亀山を出

舞見御中暑

〒604 南水牧一三
京都市中京区西ノ京西鹿垣町一
電話 八四一ー二八九八番

〒607 旭英山本治三郎
京都市東山区山科竹鼻堂ノ前町二八
電話 五八一ー七六五三番

〒649 薩摩琵琶高昇流 泉勝院 峰口高昇
和歌山県白浜町走り湯白良ケ丘
電話（〇七三九四）(2)二三六八番

〒466 錦心流琵琶一水会名古屋支部 支部長 菅沼響水
名古屋市昭和区塩付通一ノ三五
電話 七六一ー四七〇八番

発した光秀は、ここで初めて己が真意を全軍にあかす。急げ本能寺へ、水色桔梗の九本旗は本能寺を取りかこみ、天下統一の覇者信長を一瞬に弑すのである。

ところで光秀が信長に叛いた理由は何であったろうか。

巷間の通説では、度重なる理不尽な信長の仕打ちへの恨みが嵩じた結果であるとする。しかし、光秀ほどの武将の謀反の理由としてはあまりに稀薄であり、単なる私怨にその動機をみるのは浅慮である。時は正に戦国争乱の時代である。〝信長に仕えて十七年、恩顧譜代というにあらず、ただ槍一筋をもって今日あるなり〟と光秀は云っている。彼の所領は近江、丹波をあわせて二十五万石とも六十万石ともいわれるが、それらはすべて自らの力で切りとったものとの自負である。光秀が天下を望んだとて何の不思議はない。折しも信長旗下の諸将は京を遠く離れて転戦中であり、当の信長はわずか数十人の近習をひきいて本能寺に在る。「ときは今」と光秀の覇望が最高潮にふくれあがり、渦まく奔流となって老の坂を越えたのも、けだし当然と思うがどうであろうか。

竹の戦場、山崎

備中高松城を包囲していた秀吉は本能寺の凶変をきくや、たゞちに毛利方と和を結んで意外にも迅速に京に向う。高松を六月五日にたち、四日目には尼崎。光秀がこれを山崎に迎え撃ったのが六月十三日の夕刻である。疾風のごとき秀吉の東上ではあった。

光秀は山崎円明寺川に鶴翼の陣をしき、この隘路をとって秀吉を邀撃せんとする。

秀吉は高山右近（高槻城主）をこれにつづかせたが、中川清秀（茨木城主）を先鋒とし、彼は右近の後塵につくを好まず、川岸の芦の茂みに軍勢をかくして兵を進め明智軍の後方へまわる。光秀にとっては致命的な事態であった。秀吉の軍勢は三万から四万、光秀は二万に満たない。衆寡敵せず、我に利あらず、三時間余の激斗の末、明智軍は敗退する。

竹藪の小径・小栗栖

光秀はいったん前線の本拠地勝竜寺城にひくが、再起をはかるべく夜陰に乗じ、近江坂本城に間道を落ちる。久我から柱川をこえ、伏見から大亀谷へ——わずか数騎が彼にしたがった。かつて大亀谷は狼谷ともいい、名のごとく大変な難所であった。ここを過ぎると小栗栖。道は田畠をさけて山すそをう回する。

峠にかかったとき光秀は「鎧が重い」という痛切な言葉を吐く。敗将光秀には今はもう鎧すらも重かった。かつて旭将軍木曽義仲も近江粟津で敗死した際、同じ言葉をもらしたという。

戦場できたえあげた武将の体に鎧の重さが耐えられぬわけはない。しかし敗軍の将にその重さはずっしりとのしかかったのであろう。その胸中察するにあまりある。

光秀はここで鎧を脱ぎすて明暗の岐路、小栗栖の大竹藪に歩をすすめるのである。

順逆二門無　大道徹心源
五十五年夢　覚来帰一元

光秀の辞世である。

（京都銀行会長）

舞見御中暑

〒155 榎本芝水
東京都世田谷区代沢二ノ四八ノ三
電話 四六七ー〇八二八番

〒418 岳南琵琶協会 内藤欧水
富士宮市小泉五〇一ノ三

〒040 西村峡水
函館市柳町三ノ一五
電話〇一三八（51）七九七九番

〒652 安住旭康
神戸市兵庫区雪御所町一一九
電話〇七八（五二一）〇三三〇番

舞見御中暑

〒154
東京都世田谷区太子堂二丁目二番八号
電話（四一四）六五七八番
宮崎直二

〒343
越谷市大成町一ノ二三九二
電話〇四八九（八二）一二四一ー三番
日本琵琶振興会本部
鈴木流泉

錦心流琵琶詩吟蓮水会
会長　三浦蓮水
〒662
西宮市羽衣町七ノ三四番
電話〇七九八（33）五八八七番

井上碧水
反町紫水
竹内優水
楊蓮清
山崎蓮桜
吉山蓮紅
川上蓮糸
田村吟魁
吉田吟葉
尾崎吟竜
千藤吟泉
木の宮富子
村上昭子
伊藤操

詩吟部一同

舞見御中暑

〒173
東京都板橋区板橋一丁目二十一番四号
電話（九六一）一二〇〇番
池上作三

〒651
神戸市葺合区上筒井五ノ四ノ二
電話〇七八（221）一一六一番
筑前琵琶・旭会・旭堂会
柴田旭堂
宝塚花組
上原まり（旭艶）

〒181
東京都三鷹市上連雀二ノ九ノ一二　大村方
日本琵琶三位研修同志会本部
大村皷城
坂本錦道
山崎光水

琵琶道の真髄は絃心歌の三位一体の練磨に在ることは夙に先師の唱導する所、我等はその発想をかの島津日新公時代の徳性高き原点に復帰し、人格の修養に重点を置き琵琶道本来の伝統を厳守し、気品と謙虚枯淡の格調と伝統を追求する。

舞見御中暑

筑前琵琶旭鳴会本部
〒171
藤巻旭鴻
東京都豊島区高松三ノ十二
電話 〇三（955）三六四五番

錦心流琵琶一水会新潟支部長
新潟県琵琶協会長
新潟市音楽芸能協会常任理事
〒950
樋口禁水
自宅
新潟市米山西通り一四九番地
樋口耳鼻咽喉科医院
（医学博士 樋口 要）
電話（〇二五二）四四ー七〇九二番

薩摩琵琶正絃会
〒164
仲川秀邦
東京都中野区中央一ノ三二ノ六
電話 （三六一）七七四〇番

薩調晴風会
会長
〒164
浅野晴風
東京都中野区中野二ノ二五ノ六
電話 （三八一）八九二二番

筑前琵琶詩吟教授
日本旭会旭登会々長
〒189
法桂山若宮旭登
東京都東村山市美住町一ノ四
久米川公団 九ノ二〇四
電話〇四二三（91）九三二一番

びわを楽しむ会
高嶋哮水
〒658
神戸市東灘区御影石町二ノ六ノ三六
番匠渚水
〒573
枚方市上野一ノ八
田中歔水
〒658
神戸市東灘区御影中町一ノ十四ノ十五

舞見御中暑

錦心流琵琶
〒145
松田静水
東京都大田区南千束三ノ十七ノ十二
電話〇三（七二七）七〇七〇番

薩摩琵琶四明会員
同 鶴絃会主
〒431-31
小野鶴彦（晃陽）
浜松市積志町 一八三一
電話〇五三四（34）〇八七一番

筑前琵琶橘会
〒250-04
押川旭葉
神奈川県足柄下郡箱根町強羅一三〇〇 紅葉閣
電話（〇四六〇）二ー二一一二

吟詠蘇水会
錦心流蘇水会
〒040
高橋蘇水
函館市青柳町二六ノ一四
電話 （二二）八三六五番

錦心流琵琶吟水会
〒570
金寄靖水
小西甫水
小川吟水
守口市緑町土居団地十一号
電話（九九二）五六二五番

〒543
桃木耳水
大阪市天王寺区伶人町七八
電話〇六（七七一）一〇六九番

〒534
野尻摂水
大阪市都島区毛馬町五ノ十一ノ十四
電話〇六（九二二）二五六一番

〒664
浅見汀水
伊丹市荒牧日生住宅
電話〇七二七（八一）九六九一番

舞見御中暑

筑前琵琶橘会宗範
大和流琵吟家元
山崎旭萃
山崎光椽
〒569
高槻市津之江町二丁目一二ノ三
電話〇七二六（71）六五八〇番

日本芸能顕彰会
理事長
鈴木鉦次郎
〒111
東京都北区田端町一五三
電話（八二一）六六六二番
振替　東京二〇〇四一番

大館派琵琶教室
詩吟天溪流宗家
洲鳳会々長　山田洲鳳
〒160
貸席洲鳳会館
東京都新宿区新宿一ノ十四ー九
地下鉄御苑駅前〒隣　洲鳳会館
二、三階
電話（三五二）七三六六番

舞見御中暑

松岡旭岡
伊藤旭暢
〒520
大津市逢坂一丁目一二ノ三一
（蝉丸神社前）
電話　大津（二四）九三二八番

日本旭会東大阪旭会
会長
桝本旭風
〒537
大阪市東成区神路三ノ八ノ十八
電話〇六（九八一）二二九一ー四
（九七二）二七七八番

高千穂旭楓
〒544
大阪市生野区小路二丁目二六ー二五
電話〇六（七五三）〇三二五番
（七五一）〇六六七番

松田旭波
〒573
枚方市御殿山南町三番五七リ二〇四
電話〇七二〇（四一）七六〇〇

吟詠琵琶赤心流
家元
赤心流鶴翁
〒420
静岡市西草深町二十一番二十号
電話〇五四二（58）一四七一番

舞見御中暑

錦心流
熊木菱水
〒350
川越市南通町一二ノ一一
電話　川越（二二）四四六一番

都錦穂
〒113
東京都文京区根津二ノ十五ノ二
電話　（八二一）五七〇八番

秋元旭晨
大阪府三島郡島本町桜井四丁目一八ノ一〇
電話　〇七五（961）五〇四三番

岡部錦蝶
薩摩琵琶錦水会
正絃会・四明会・さつき会会員
〒198
〒550
大阪市西区京町堀五ノ一一
伊勢谷方
電話（四四一）一九六六番
東京都青梅市大門七八七ノ一
岡部方

市来芦村
芦屋市三条町二四八
電話〇七九七（22）四三三八番

高橋旭洋
筑前琵琶旭会
舞鶴琵琶協会事務所
〒625
舞鶴市朝日通五条東入
電話〇七七三（62）五二六二番

舞見御中暑

京都琵琶協会
一水会京都支部
錦心流木村維水
〒621
自宅　亀岡市千代川町今津
電話（〇七七一二）三一〇五六四
事務所　全京商工企業組合
電話　八〇二一三一八五

水也田流琵琶楽
琵琶講談
縁鶯斉美登里進水
〒600
京都市下京区西新屋敷下之町
電話　三四一一一六七四番

筑前琵琶
大津旭会々長
戸倉旭嶺
〒520
大津市中央一丁目一番十号
電話〇七七五（24）五〇六五番

坂本錦道
〒183
東京都府中市新町二ノ六八
電話〇四二三（61）五六八四番

青雲流
故鈴木蘭光
栄子
〒485
小牧市藤島団地四六七号
電話　小牧（七六）七二五七番

土手に飛び交ふホタルの虫は…。
春は花、夏は隅田の夕涼み、
お江戸情緒たっぷりな、過ぎし
昔が懐しいわえ。

早乙女千秋
（邦楽評論）
〒164
東京都中野区弥生町四ノ十二ノ六　弥生荘内
電話　（三八四）二八二〇番

氏の胸像や記念碑があるだけだが、こゝは吉備史跡と県立自然公園になっている。

高松バスの停留場から本丸跡まで行く途中に右手に玄妙寺がある。云い伝えによると、こゝが宗治舟中で自刃した地点といわれ碑が建っている。遠く遙かには秀吉が本陣を置いたという竜王山が見える。

筑城跡は蛙ケ鼻と足守にほんの少しだけ残っているが、大変わかりにくゝ、そうだと聞けばそのように思われる程度のものであった。

狂醉亭漫録（第九十二）

其後の寺坂吉右衛門

古谷竟水

前回迄で赤穂義士の最期に就ての記述は一応終了したが、実は四十七士の一人寺坂吉右衛門の件が見当らぬのである。

之は其の筈で、討入直後一同が両国橋の手前を左に曲り泉岳寺へ引揚の途中、寺坂は密かに脱走したのである。是は大石の内命によるもので、内匠頭の後室瑤泉院に仇討完遂を報告し、更に足を伸ばして江戸を後に但馬豊岡なる大名の妻子の許へ仇討報告に旅立ったのである。大石としては此の使命に事寄せて寺坂の義徒中最軽輩たる足軽の身分を憐れみ助命を目指す慈悲の計らいであったのだ。

一同が泉岳寺へ引揚の直後大石から提出された討入人名簿により、大目付仙石伯耆守が

暑中御見舞

〒060-91
広川岳楓
札幌市中央区南六条西七丁目
電話（011）五一一ー八三四八番

全国朗吟文化協会関東副部長
テイチクレコード専属
群馬琵琶連盟会長
宗家　針谷錦古
〒370-12
高崎市岩鼻町二四七（局前）
電話〇二七三（46）二〇〇六番

人員を点検した際、寺坂一人が見当らず之を大石に糺すと「討入当時より今朝迄は確かに居りましたが、泉岳寺到着の直前より其の姿見えず、何分身分軽き者とて詮方もございませぬ」と呆けて答えている。

その為義士お預けの四家の中、久松隠岐守家では十人預かる予定の処、寺坂一人を減じ九名を預かり、自然当家に於ける切腹人員は九名であった。

十二月十五日朝の事、故内匠頭後室瑤泉院の現在の住居たる浅野土佐守長澄の邸に一人の飛却体の男が来て、大封の一書を取出し、「私事は京都紫野瑞光院よりの飛脚、此御書状を瑤泉院様御手許に」と其書を差出した。取次の者が受取って入らんとすると飛脚は、「其れでは確かに御受取下されたい。私は是にて御暇申上げまする。」と早足に立去った。

瑤泉院は何事ならんと聞いて見れば、何ぞ図らん大石の手で一挙の顛末に添え、一冊の帳簿に一万両の用途を一々詳細に明記して、少額の残金さえ封入してあった。

之は最初赤穂退去の際、内蔵助は国庫の残金を処分し、一部は藩内諸氏に分配し、一部は御家再興準備金として自身で預かったので金額は約一万両であった。後日大石は山科に隠栖し、贅沢もし放蕩もし、又子孫の計も図ったので彼を疑う者も、爪弾きする人もあったが、其実彼は此一万両を以て一切の軍費を支弁し、其残金を今日返上したのであった。

之を受取った時の瑤泉院の喜悦と感謝は如

暑中御見舞

日本民主同志会中央執行委員長
社団法人日本郷友連盟本部理事
宗教法人世界救世教外事対策委員長
京都救世会館名誉館長
日本伝統芸術連盟理事長
松本明重

日民同
京都市下京区四条通堺町東入
本部事務局（ゑびやビル6階）
電話（〇七五）二三一ー〇〇三二・一四〇〇番

世界救世教
熱海市桃山町瑞雲郷
本部
電話（代）（〇五五七）八二ー一二五一番

自宅
側万寿町五七〇
電話（代）（〇七五）五四一ー一三三七番
京都市東山区祇園町南

雲濤居
京都市東山区山科日ノ岡堤谷町七五ー十一
電話（〇七五）五九二ー〇四〇四番

正派　薩摩琵琶四明会
〒603
事務所　京都市北区平野宮西町六四
平井春嶺方
電話〇七五（462）一四二二

会員
京都　栗本天芳
〃　伊吹正陽
〃　平井春嶺
大阪　小林捷捨
〃　香川錦風
〃　岡部錦蝶
神戸　長谷川博章
〃　有馬南城
〃　藤崎天光
高槻　原口天孫
枚方　山之内兼光
〃　山木岳盛
豊中　杉本治作
川西　内田良三
芦屋市　来芦村
名古屋　山田叢雲
浜松　小野鶴彦
久留米　島津正

名誉会員
京都　早石天波
大阪　伊勢谷安江
〃　杉秀夫

何であったろうか。俗説の大石南部坂雪の別れの物語は全部虚説であることは先年既に述べたが、この寺坂使者の件は、南部坂の物語の代替となるべき史実と私は確信している。

大石が赤穂開城後一旦京都山科へ落付き、今後自己の活動の便宜を思い家族一同を妻の実家へ預けた事、即ち琵琶歌の山科の別れの一件は事実には相違無いが、此際の内蔵助の母親まで同道したとは、演劇講談等の脚色にもあるが、此の時点に於て大石の母親が果して健在であったか否かに就ては、何故か史書には明記されていない。

出発に先立ち大石が妻を離別し子供達を一応勘当の形式を取ったのは、仇討本望達成の後罪の裁きが妻子にまで累を及ぼす事を憂慮しての、大石の遠大なる思慮の結果である。

妻の実家は但馬豊岡藩主京極侯の家老石束源五兵衛毎好という人であり、妻の名は晩年香林院と称していたとは判明しているが、俗名は判らない。但し芝居其他ではお石と称しているが、之は大石の妻だからお石位がよかろうという、作者の定めた思いつきに過ぎないようである。

大石は三男三女の親で、長男松之丞即ち後の主税良金で、之は山科に残り後日討入りに参加する事は皆様御承知の通りである。

又女子は二人まで早世したので、豊岡へ預けられたのは一人だけで、即ち二男吉千代後に出家して祖練、三男大三郎後の大石外記良恭、娘お空後にお智嘉とて青山大膳亮の家臣青山蔵人に嫁いだ娘と計三名の子供を連れ、大石の妻が豊岡の実家へ戻った事になる。

討入の翌朝江戸を離れた寺坂が日数重ねて豊岡に到着、仇討の模様から事前運動の次第まで詳細に渉って、大石の舅石束を始め、大石の妻子に報告し、大いに喜ばれた一件を巧みに脚色した古劇が「忠臣二度目清書」として古来上演されている。勿論芝居では大石の母も同行した事になっている。又義士一同に対する断罪の件については、寺坂は何等知らない為触れる事は無かった筈である。

其後の寺坂の動静に就ては史書では殆ど判らない。一説によると寺坂は、播州姫路に在る義士吉田忠左衛門の聟の伊藤十郎太夫の許に落着き、同家の下僕同様の暮しをした。

然るに伊藤の主君本多中務太夫が死去したり、其殿様が少祿に転封されたりし、伊藤家も之に従い三州刈屋に移ったり、寺坂も困窮に陥り乍らも十二年間伊藤家の為に尽した。

主人も之を憐れみ江戸麻布の曹渓寺方丈の梁州に紹介して寺坂を江戸に送った。時に寺坂五十一歳であった。梁州は寺坂の人柄に惚れ込み、土佐山内の分家で当時旗本の山内主膳豊清に紹介したので、寺坂は之に仕えて優遇され、国許より妻を引取り幸福の余生を送り、延享四年十月六日八十三歳で卒去、兎に角彼は天寿を全うした。夫妻の墓は前記曹渓寺に在るという。

さて泉岳寺であるが討入事件後六十五年後の明和四年九月十六日付で、節岩了貞信士、

舞見御中暑

京都琵琶協会
〒602
京都市上京区今小路通七本松西
伊吹方　電話（461）六三四八番

伊吹正陽　伊東旭山　戸倉旭嶺　戸田公　若宮旭登　田中鵬水　植村寛水　梅原旭濤　矢吹華水　安住旭康　山本英舟　山本南嶺　牧谷竟水　古本峰水　阪内水　木村維一　水口昇水　峰高凝水　美登里進水　平井春嶺

寺坂吉右衛門信行と刻した墓が建てられたが何人の建立か判らないという。

寺坂が討入後姿を消す事が無かったら、当然久松隠岐守邸で切腹した筈で、建碑者の無識の為か、討入当夜の功労者間十次郎光興の墓の上位に建てられている。福本日南も之は当然久松邸にて切腹した大高源吾の墓の次に建てらるべきものと嘆いている。

我が道を行く　六十五年（六）

西郷天風

一方筑前琵琶の方も橘智定翁を宗家とする橘流の外に、津留崎流、吉田たけ子の吉田流、或は高峰筑風氏の高峰琵琶など云う門派が勢力を張って、明治の末期から大正を経て昭和の初期までの間に於ける琵琶界は、正に未曽有の最高調に達していた。その中でも断然群をぬいて人気を集めていたのが、錦心流宗家を名乗る永田錦心師であった。

この錦心流が確固たる伝統と有力なる支持者を有し、しかも芸術的要素や軍国主義時代向の迫力に富む正派薩摩琵琶を、遙かに凌駕することになった其所以を考えて見れば、永田錦心師の師事した錦水会宗家吉水錦翁先生が、早くから薩摩琵琶を九州の一地方特有の芸能に止めることを惜しみ、之を日本全土に布衍すべく考慮の揚句、語気の荒い九州弁を柔げて東京弁、つまり標準語に改め、琵琶の弾法にも手加減を加えた結果、本場の薩摩隼人向から離れた優にやさしいものとなった。故にこれを帝国琵琶なる名称に改め、歌本も帝国琵琶練磨集と銘打って、その中表紙に帝国琵琶と命名の理由を明記してあったが、それが明治三十八年の日附だったと記憶する。錦心師はこの帝国琵琶を基本とし、之に師独得の節廻しが生じ、更に弾法なども極端に簡易化されたのが、時代の波に乗ったものであった。

されば、帝国琵琶の出現はとりも直さず薩摩琵琶の一大革新であり、更に永田錦心師の出現はこの革新を、尚一層時代向に飛躍せしめたのであった。

この時代の寵児永田錦心師の人となりを考察するに、師は芝の三田あたりの産で、父君は洋服裁縫師、母堂は哥沢か何かの名取りで、新橋あたりの美妓が同門の関係で常に出入りしたからには、錦心師は母堂の胎内にある頃から三味線音楽に接し、物心つく頃にはその節廻しを真似る程であったという。

だから長じて琵琶を習う頃には、その節廻しに哥沢か何かの節が加わって異色の琵琶節が生まれたのであった。この事に付ては、かつて平豊彦先生の門弟だった木原美子女史の話によっても合点がゆくのである。

先年八十二歳の長寿で物故された木原女史

舞見御中暑

竹下翠風
〒166
東京都杉並区下高井戸五ノ二二ノ一二
電話　〇二二（303）五八九四番

鈴木蒼士
〒176
東京都練馬区豊玉北五ノ一一
芸の友社
電話（九九一）〇三六三番

伊藤啓水
一水会新潟支部
〒950
新潟市粟山三九九ノ一
電話〇二五二（76）〇二〇八番

星野巌水
錦心流一水会秋田支部
〒011
秋田市土崎港中央四丁目九番二十六号
電話　（46）三三三四番

が、明治末期二、三の同僚と共に平先生の門に居た頃、錦心師が入門して来た。非常に美しい声の持ち主で節廻しもよく将来有望である、だが持ち前の芸風からみると、吉水錦翁に師事する方が適して居るから其処へ行く方がよかろうと、平先生自ら添書をつけて錦翁先生の門に入れたとのよし、後年錦心流の最も特長とする節に、平先生独得の節が伝えられておるのをみることが出来るのも宣なるかなである。

さて、時は我が日本が国力を賭して戦い且漸く勝利を得た頃、即ち日露戦争終結の悦びに人心浮き立っている時分、筑地方面にトンボと称する、金銭の威力では玄関にもはいれぬと云う格式の高い料亭があり、政界財界商工界は勿論軍部将官等一流社界の人々による宴会が毎日毎夜開かれていた。絃歌が断えたことのないのは当然ながら、その中に偶々琵琶の音を聞くようになった。其琵琶の主こそ誰あろう、当代一流の琵琶名手として評判高き永田錦心師であった。

錦心師は前述の如く吉水錦翁先生の許で帝国琵琶を研讃中、琵琶歌と三味線音楽の混合された節が生まれ、それが戦勝景気の宴席にウッテツケの音曲として持て囃された訳だが、それについて斯様な噂が盛んに聞かれた。錦心師の母堂は哥沢の名取りである関係から、新橋辺の芸妓達との交遊があり、そこへ新たに錦心師の琵琶が有名になるにつれ、芸妓達の間にこの新しい音曲へのあこがれを宴席で満喫するという空気が広まって、錦心師の宴席招待が盛んになった。従って錦心御当人の弾法の方は未だ熟しておらぬ内に堂々たる名手となってしまい、琵琶本来のながたらしい弾法など無くても、何等差支えない状態となってしまった。

このむつかしい且免倒な弾法は無くとも、節の美しさが立派に琵琶楽として世に持て囃されるとなると、声に自信のある人士は一躍有名な芸能家として世に出ることも出来、遊芸師匠として華やかな生活を楽しめる、とたると、この新しい職業にあこがれる者が雨後の茸の如く続出して流行に拍車をかける結果、茲に錦心流なる流派が確立し、宗家の免状制度によって堅実なる格付の下に、琵琶師匠という新職業が芸能界にデビューするに至った。

元来琵琶と云う音曲は楽器の名称から来たものであり、従って弾法が主体であったものと思われる。ところが錦心流が生まれてからというものは、弾法などどうでもよい状態となってしまい、甚だしいのは、琵琶と云う楽器は節廻しの区切りにチョイと息をつく間に弾くに過ぎない、と云う説が成り立ち、その結果、片や歌本位、片や弾法本位という二つの主義主張を生ずるに至った。今日でこそ、錦心流の人達の弾法が正派人より達者が多くなり、昔弾法を主体とした正派人より、歌本位を主眼とした錦心流の人達の方に弾法の達者が現われたとは、正に主客転倒と云うべきか。

（以下次号）

走馬灯

滝原流石

赤き月　地に墜つる夢みて覚むる
青簾　向うに影絵はもう居ない
瞼に痛し　若葉の頃の白き蝶
思い出が　静かにまわる走馬灯
盆灯籠　かげりに浮かぶ幻影の人
もう居ない　簾にうごく人の影

水藤さんを偲んで

早乙女　千秋

花無惨　錦の巨樹（だいじゅ）はたと折れ
君さまを　想えば涙　たゞ涙
さゝ苦し　錦の宗家いまや亡し
これからは　心の支えあるやたし
さゝ酌みて　錦の末を想うかな
琵琶聴けば　錦恋しや寿松院
寿松院　藤の一枝ほしきかな

なつかしい錦穰先生を偲び——

都　錦穂

生き死は人の運命と知りながら
夢に涙を流し居たりき
—小山寛二—

かつて輝錦師御逝去の折「花はしほれぬうちが花」と、現役のまゝ逝かれた輝先生を偲んでうたった錦穰先生が、今は自らの言葉のまゝの御立派な御最期でした。私にとって想い出多き先生のお姿を偲び、終戦直後

○子を背負い片手に琵琶を持つ姿
○貴人かとおもうばかりの気高き姿
○手作りのたあいなき料理に舌つゝみ打つなつかしい姿。
○たわむれの話に興じ二人してくづれ笑いしこともあり。
○琵琶を抱けば冷たきほどの眼恐し。
○天才の人よ悲しむなかれと時にはたしなむ我が娘。
○「私生れてから一度も使ったことがないのよ、一度さしてみたかったのだけれど…」と云って贈られた美しい櫛。
○娘にと贈られし巻絵櫛、かたみとなる今日の悲しみよ。

故錦穰師の御冥福を祈りつゝ。
みのりし錦の花は永遠に生きていくでありましょう。

言寸(21)

森蘭丸……織田信長の信愛を受けた侍童で本能寺の変の際初めて許されて刀を手に勇名をはせたが、火炎の中に戦死したときは未だ十七才の美少年であった。京都阿弥陀寺の五輪塔には「森蘭丸源長之墓」左面に「天正十年壬午六月二日戦死于本能寺」と刻んである。近くに力丸、坊丸の塔がある。

一水会多摩支部　前者第二十八回、後者第九十九回の研修会を六月十日一時—六時小金井市福祉会館で開催。白虎隊—呉究静軒、山科の別れ—篠宮楼水、羅生門—高杉洲靖、井伊大老—村木桜柳、舟弁慶—中島瀑水、小栗栖—伊藤磐水、偲錦心—石井效水、元冦—清水源城、小松の操—大村皷城、潯陽江—坂本錦道

菖蒲まつり　五月雨の晴れ間を見せた奉納芸能大会　六月十日、泉州の菖蒲どころ堺市大鳥神社菖蒲祭りに大阪琵琶同好会が協賛して午後一時から左の通り献奏して三千の聴衆を喜ばせた。那須与市—作花旭友、花の白虎隊—多和綾子、安宅の関—辻旭城、堅田落—石橋旭嶺、新撰組—寺尾旭吉栄、大楠公—中島旭穂、桜—天津八千代外四人、乃木将軍鹿島詣—美登里進水。外に詩吟五、舞踊六、剣舞一、奇術二、浪曲一、民謡三、狂言一。

第七回三位研修同志会　雀公会堂に於て開催。門琵琶合奏—山崎、坂本、白虎隊—呉究静軒、棄児—山崎光水、常陸丸—坂本錦道、伊豆の御難—伊藤磐水、城山—田戸桜丸、富嶽—菅野松神、王昭君—大村皷城、広瀬中佐—篠宮楼水、小敦盛—八束一峰、姥舞小町—山本隆水、秋海棠—新納岳窓、河内の宿—生田晃堂

第十一回琵琶を楽しむ会　六月二十四日昼神戸高嶋哮水氏邸に於て開催。時間半ばに藤本錦掌氏が水藤五郎氏を伴い来会、錦穰先生終焉の模様を詳細五郎氏から聞かされ一同涙を新たにした。当日は錦心流元老桃木耳水師を始め野尻援水、高嶋哮水、浅見汀水、大橋戎水、田中歉水、番匠潘水、小塩梁水、木下皇水各氏が一曲宛演奏した外藤本氏が琵琶に尺八を入れた新曲菅公を、又番匠氏が琵琶民謡佐渡おけさ、黒田武士を披露して共にヤンヤの喝采であった。八時散会。当日高島氏は自身揮毫の「達人の妙水の如し」その他の篇額を一同に贈られた。

日本琵琶振興会六月例会　六月二十四日正午—八時東京新宿洲鳳会館で開催。茨木—小沢錦弥、異国の丘—山田洲鳳、安達原—三田村錦霞、薩摩守—望月啞江、本能寺、吉野落—鈴木流泉各氏演奏のあと「琵琶聴き